●書学書道史学会
会報
第1号

平成13年(2001)6月1日発行
編集・発行
書学書道史学会
事務局
東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031　美術新聞社内
TEL(03)3462-5251(代)
FAX(03)5489-7288(直)

ごあいさつ

興膳　宏

一九九〇年に誕生した書学書道史学会が十二年目を迎え、また二十一世紀という新しい時代に踏みこんだ節目の時期に、理事長の大役を仰せつかり、大きな緊張感を覚えます。初代理事長として、この十年間、終始先頭に立って学会活動をリードしてこられた西林昭一先生は、学会の顔たるにふさわしい中国書学史のすぐれた学者です。ところが、私はといえば、専攻する中国古典文学とのかかわりで、書の分野にも多少の関連を有するというだけの人間で、どう見ても書学や書道史学の専門家とはいえません。だから、理事長の役目には、当初どうしようもない当惑感がありました。

しかし、よく考えてみれば、「書学・書道史学」という学問は、まだごく新しい分野です。というよりも、むしろこの我々の学会が生みだし、育て上げようとしている学問です。そこには、「書」に関するあらゆる問題が研究の対象として取り上げられるはずです。

そして、そもそも本来的には意思伝達の手段であった文字が、芸術の一分野たる「書」として独自の発達を遂げたのは、東アジアの漢字文化圏に特有の現象でした。

「書」は、いかに書かれているかという形体上の側面と、何が書かれているかという内容上の側面が緊密に、かつ渾然と融合して成立した芸術として、特有の意義を持つといってよいでしょう。だから、「書」という芸術形式そのものがすでに複合的な性質を内在させているはずです。その「書」を対象とする「書学・書道史学」は、考古学、歴史学、哲学、美学、文学、言語学といった多様な領域との間に、四通八達といってもよい自在な関係を持つ学問といえるのではないか。ならば、「書」に関連する文化の一端を研究しているという立場から、学会の発展のために多少ともお役に立つことができるかも知れない、と頭を切り換えて、この任務をお引き受けした次第です。

わが学会は、創立十年目にして、国際学会という大きな企画を首尾よく成功裏に達成することができました。それは、会員各位の貢献によって、学会がそれなりの実力をつけてきたことの表れであろうと思います。我々は十分な自信を持ってもよいでしょう。だが、その一方で、事務局体制の整備をはじめとして、将来の課題として残されたことがらもなお少なくありません。これからも広く会員各位の知恵を結集して、さらなる学会の発展を図ってゆきたいと考えています。どうか皆さまの積極的なご支援とご協力をお願いします。

（本会理事長）

本年度・第12回大会開催案内

本年度の第12回書学書道史学会大会について、お知らせします。大会は今年も、11月9日㈮から11日㈰までの3日間にわたり、名称も改まり新都心として脚光を浴びている「さいたま市」の埼玉大学キャンパスで開催する運びとなりました。詳細プログラムや発表者、交通案内等は10月発行予定の「会報2号」でお知らせしますが、現在までに固まっている大要は以下の通りです。

○日程＝11月9日（金）午後4時30分から定例理事会（於浦和東武ホテル）

11月10日（土）午前9時受付開始、9時40分から総会・研究発表・懇親会を順次行い、午後8時終了予定。

11月11日（日）午前10時現地集合にて、午前中は古河市の篆刻美術館を見学。鳴鶴関係の展示が行われており、併せて杉村邦彦副理事長による講演も予定しております。午後1時からは、会場を移して古書画及び拓本（明拓）の特別陳列の鑑賞会（列品解説あり）を行います。午後3時、現地解散の予定。

○会場＝埼玉大学・大学会館（さいたま市下大久保255、JR京浜東北線北浦和駅からバス約20分、埼京線南与野駅からはバス約10分）＝写真＝

○備考＝宿舎については、大学周辺には規模的に適当なものがなく、東京からも至近距離という条件にも照らし、今年も各自でお願いすることになりました。

（国内局・'01埼玉大会運営委員会）

業績調査結果の公表について

昨年実施致しました会員各位のご研究業績調査については、学会誌第10号でもご報告しました通り、約550名の会員のうち約100名の方々からご報告を頂きました。ご協力に対し深く感謝致します。

そこで当委員会では、この調査結果の公表方法について検討を重ねた結果、学会として今後の斯学振興策の一環という主旨からも、また引き続きさらに幅広く会員各位のご協力を頂き、その情報を逐次反映させられる利便性という観点からも、インターネットの学会ホームページに掲載する方法を試みることに致しました。

公開方法は、①論文等のタイトル②著者名③掲載誌④発表年、を単位データとして、分野別に括って掲載する形をとり、会員の個人別業績一覧という形はとりません。

学会ホームページは現在のところ、㈱萱原書房のホームページ（http://www.kayahara.com）に〝間借り〟する形で開設されていますので、同ページにアクセスして頂けば、学会の概要や、

本年度・第12回大会研究発表募集

今秋の第12回大会は、別項でご案内の通りさいたま市の埼玉大学キャンパスにおいて開催の運びとなりましたので、例年通り会員各位より下記の要領で研究発表の申し込みを受け付けます。21世紀を迎えて最初の大会でもあり、書学書道史ならびに関連諸分野の斬新なご研究成果の発表を期待します。ぜひ、奮ってお申し込み下さい。

記

1）発表日時：平成13年11月10日（土）午前～午後（発表者が多い場合は、分科会方式を採用します）
2）発表時間：各40分間（質疑応答時間10分を含む）
3）申込方法：適宜の形式の「大会発表申込書」に標題・氏名を明記し、800字程度のレジメを添えること
4）レジメの形式＝レジメは、10月発行の本会報第２号に付録として添付し、全会員に事前配布します。形式はＢ５判のページの概ね縦20×横14cmのスペースを各発表者に割り当て、提出されたものをそのまま、または縮小転写して軽印刷にかけますから、このプロポーションに仕上げて提出してください。ワープロ印字、手書き、縦書き、横書きを問いません。図版は掲載不可。
5）申込締切：平成13年７月25日（水）＝必着＝
6）決定と通知：７月末の大会運営委員会で決定し、８月上旬に個別にお知らせします。

※本大会発表については、学会誌『書学書道史研究』第12号（平成14年秋刊）への論文投稿申し込みがあったものとして扱われますので、改めての投稿申し込みは不要です。
※この原稿の締め切りは来年３月末日です。投稿原稿は、査読委員会で採否が決定されます。学会誌掲載についてご不明の点は、編集委員会まで文書でお問い合わせ下さい。
※発表申込書とレジメは、封筒に「レジメ在中」と明記して下記へお送り下さい。なお、事故を避けるため、出来るだけ配達記録郵便をご利用下さい。

〈送り先〉〒150-0031東京都渋谷区桜丘町29-35　ヴィラ桜ケ丘ビル７Ｆ
書学書道史学会国内局・'01埼玉大会運営委員会　宛

国際大会の全発表論文のレジメなどもご覧頂け、簡単にダウンロードもして頂けます。

つきましては、もしご報告頂いた論文タイトル等をこの形で公表することに同意頂けない場合は、6月末日までに当委員会宛、文書でご連絡ください。その方については、掲載省略の手続きをとらせて頂きます。7月中頃までには、前記の１００名の方々について掲載できる見通しです。

また、調査票の返送をご失念の方は、これからでも結構ですからお送りください。順次掲載していく方針です。調査票の返送に代えて、メールで添付ファイルの形でお送り頂くこともできます。その場合は、前記①～④のデータに、「論文等分類コード表」（事務局に用意）により⑤として分類コードと、⑥としてキーワード（複数可）を付してファイルを作成し、事務局長（kayahara@saturn.netspace.or.jp）宛に送信して下さい。

なお、会員各位の「作品業績」については、近い将来、学会ホームページに希望される会員の個人用ページを設けることを検討しており、そこで代表作品の図版掲載を含め会員個人情報を公開する案なども出ております。この件については、ぜひご意見ご提案をお寄せ下さい。

編集局・編集委員会

Today's Feature

新出土史料の一斑

西林　昭一

中国の埋蔵文化財には、目が離せない。つい先ごろも成都市の金沙遺跡で、殷代晩期とおぼしい「約千点の玉器・青銅器その他を発見」という新聞報道があった。書もそうだ。例えば、顔真卿がその〈多宝塔碑〉より三年前に書いた〈郭虚巳墓誌〉（七五〇年）が、一九九八年に出土した。『文物』二〇〇〇・一〇に正式報告があり、現地でこの拓本を購得した会員の辻井京雲氏が『書道美術新聞』に紹介された。私も執筆中の『中国新発見の書』（仮称）に一文を草したが、また同じ年に興味深い墓誌が、南京市郊外で出土していた。掲出の〈高菘墓誌〉（三六六年）である。これは『文物天地』二〇〇〇・一で知ったのだが、正式な発掘報告はまだない。

この高菘夫妻墓は未盗掘で、金・銀・玉ほか珍貴な文物が二百余件伴出した。《98年中国十大考古発現》の一つに入ったという。『文物天地』は、玉と金器に焦点をあてた紹介で〈高菘墓誌〉に関しては、大約「長方形の大塼。精巧な刻で点画内には朱を填めている。書法は清秀洒脱、楷書の気味が濃い」という。が、肝腎な法量を記していない。ちなみに、伴出した高菘夫人の〈謝氏墓誌〉（三五五年）は、内容も図版も未報告である。墓主の高菘は『晋書』巻七一に伝がみえ、官は侍中に至り、建昌伯に封ぜられた顕官である――言及すべきことはあるが、略につく――。そうした穿鑿より、私にはこの書が気になる。

一体、南京地区で出土した西晋より劉宋の墓誌のうち、有紀年のものは〈謝鯤墓誌〉（三二三年）以降、〈謝珫墓誌〉（四二一年）まで約二十種あるが、当時の通行体でなく、いわばキチンと書刻した墓誌は、周知の〈王興之墓誌〉（三四一年）その他や、これまた一九九八年出土の〈王建之墓誌〉（三七二年）ほかにみる、当時のいわゆる〝銘石体〟である。これに対して〈高菘墓誌〉は、冒頭の「晋」字が銘石体によるほかは、〝三過折〟による楷書体である。

誤解を懼れず結論すれば、〈朱然の刺謁〉（二四九年）ほか、簡牘に用いられた実用通行体の楷書が、東晋時代に至って洗練度が加わり、標準書の銘石体に仲間入りした象徴的な作ではないか。たった三一字ではあるが、書体変遷史上、貴重な作例だ、と私は思う。〔附・本稿送付の直後に届いた『文物』二〇〇一・三で詳報を知った〕

（本会常任理事・前理事長）

書学藻塩草

原本か摸本かの鑑識の方法

古谷　稔

書跡の文化財には、〝書〟として魅力的な遺品が含まれ、それらは文学・歴史・美術史などの重要な基礎資料を兼ね備えてもいる。今後、書学書道史の研究において、慎重かつ正確な判断が期されるのは、遺品の〝書〟としての位置づけである。それらが、〝原本〟か〝摸本〟かによっても大きな違いが生じるからである。

近年、これに関連した問題が指摘されている。それは平林盛得氏の精緻な論考「館蔵及び御物の熊野類懐紙について」（『三の丸尚蔵館年報・紀要』第5号・平成10年度）に見える。後鳥羽院が熊野三山に参詣途中に開催した歌会で書された「熊野懐紙」に対し、それとは全く別の歌会で成った一群の和歌懐紙に「熊野類懐紙」（以下、類懐紙）があり、国文学・書道史で知られている。この類懐紙が御物に四枚伝わり、うち一枚が平成元年に宮内庁三の丸尚蔵館に移管されたため、平林氏が新収蔵品として紹介されたのである。

氏は、右の論考で田村柳壹氏の研究に注目し、和歌史上、一群の類懐紙を「詠月次和歌」（仮）として一括された点で従来の研究との違いを評価され、そこから抽出された結論の一つとして、上記御物の四枚は、いずれも正治二年〈一二〇〇〉の夏から秋にかけて後鳥羽院が近臣とともに開催した当座歌会のおりのもの、と受け止める。これは正治二年と建仁元年の両年の筆になる「熊野懐紙」と時期的にほぼ一致することから、類懐紙と「熊野懐紙」との書風を比較する上で極めて好都合である。

かつて、稿者は右四枚のうち、後鳥羽院・藤原範光・藤原公経の「詠荻風増恋和歌」と題する懐紙三枚はともに摸本と考察した（『皇室の至宝5・御物　宸翰』平成三年・毎日新聞社）。これについて平林氏は、とくに後鳥羽院の一枚は「詠花有歓色和歌」と題する類懐紙（上記紀要の挿図6）と比較すべきであり、また、範光・公経についても、他の類懐紙の位署と比べて模写とは認めがたく、類懐紙全体として検討すべきではないか、と示唆される。そこで改めて、後鳥羽院「熊野懐紙」（A）と前掲の同「類懐紙」（B）の中の数文字を対比したが、やはりAとBとでは筆が異なるようだ。

今後の残された課題は、原本か摸本かを鑑識する方法に期待が寄せられる。これについては、改めて学会での発表、または学会誌等に寄稿する機会を得たいと考えている。

（本会理事）

随想
先達の思い出

中田先生と鉛筆

杉村　邦彦

恩師中田勇次郎先生が、平成十年十月二十三日に九十三歳で亡くなってから、早くも二年余りが過ぎた。あの恰幅のよい温容が折に触れて眼前に蘇り、追慕と感謝の念が深まるばかりである。

私はこれまでにも新聞や雑誌に求められ、あるいは自ら進んで先生の学問や生涯などについてすでに数篇の蕪稿を発表してきた。そして今回、『書学書道史学会報』の創刊号を出すに当り、編集部からまた中田先生のことについて書くように求められた。

先生は御専門の中国文学や書学に関する該博な蘊蓄にもかかわらず、お人柄は実にひかえめであったから、逸話として伝えるような奇言奇行はほとんどなかった。平素の暮らしぶりも、人とのおつきあいも実に淡々としたものであった。それは先生が文章にもよく書かれた「平淡天真」ということを、あるいは京ことばで謂う所の「常なり」を地でゆくようなものであった。

中田先生の鉛筆書き原稿

先生は、原稿を書かれるのが実に速かった。先生の責任編集で私たちも少しお手伝いをした中央公論社の『書道藝術』、『中国墓誌精華』、平凡社の『中国書道全集』、二玄社の『中国書論体系』、東京美術の『顔真卿書蹟集成』、淡交社の『中国の美術』書蹟篇など、いずれの場合も先生の原稿が一番乗で到着し、私たち若い者の原稿が遅れるのが常であった。先生の原稿が速かったのは、深い学殖や蘊蓄に基づくことは言うまでもないが、一つには原稿の書き方にもよると思われる。

先生は原稿を書く時も、帳面にノートをとる時も、鉛筆を常用されていた。私たちが小学校のころ使っていた蓋つきのセルロイドの筆箱に鉛筆が四、五本と消しゴムとナイフが入っていた。大著『文房清玩』の著者としては、もっと筆記用具に凝ってもよさそうなのに、ごくありふれた質素なものを使われていた。ノートは普通の大学ノート、原稿用紙は各出版社から配られるB5判二百字詰のものが多かった。ある時先生に、「万年筆は使われないのですか」とお尋ねすると、「万年筆は使いません。鉛筆だと消せますからね」とさりげなく言われた。

その鉛筆の筆跡がまた実に端正でかつ流麗であった。古法帖に見る王羲之の書がそのまま抜け出てきたような、実に見事なものであった。倉卒の間のメモでも、いいかげんな崩し方はされず、古法にかなったものであった。時々頂く手紙や葉書は毛筆で、その見事なことはもとより鉛筆以上であった。

私は原稿を書くとき、鉛筆でまず下書きをし、さらに推敲を加えながら万年筆で清書をして仕上げている。いつであったか、西林昭一さんと話をしているとき、西林さんは私とは逆で、まず万年筆で下書きをしたあと、鉛筆で清書をするとのことであった。世の中には変わった書き方をする人もいるのだなあ、と感心したのであった。

中田先生の場合、予め草稿を作ることはされなかった。鉛筆書きの草稿がそのまま原稿であった。もっとも字句を訂正したり補う時は、消しゴムで消して仕上げられた。

先生の最晩年に近いころ、私は鉛筆用の電動消しゴムを買って差し上げたことがある。それをお渡しするとき、紙に鉛筆で線を引き、それを使って実演しておみせしたところ、「これは便利ですね」と言って喜んで下さった。もっとも電動消しゴムのゴムはちびやすいので、時々取り換える必要がある。そこで「先のゴムがなくなれば、寺町（京都）の文適堂にありますから買って下さい」と言い添えたのだった。しかし、その後も先生には何度もお目にかかっているが、電動消しゴムの話はついぞ出なかったところから見ると、あるいはお好みに合わず、あまり使われなかったのかも知れない。

先生と一緒に展覧会を見に行っても、先生はいつも陳列ケースを食い入るようにのぞきながら、鉛筆で克明にノートを取っておられた。もとより博覧強記ではあるが、鉛筆で小まめにノートを取るのを習慣にしておられたのである。先生のあの厖大な著作が質素な鉛筆の先から生まれたことを思うと、感慨ひとしお深いものがある。

（本会副理事長）

◆学会誌第10号刊行記念 No.1～No.10＝10冊セット特価販売のお知らせ

本会の機関誌として、学会設立翌年の平成3年度から毎年刊行されてきました『書学書道史研究』がこの12年度刊行分で第10号を迎えたのを記念して、このたび、理事会決定により本誌の各研究機関・図書館等への架蔵促進と学会の財政面への寄与を目的に、下記の通り第1～10号の10冊をセットにした期間限定の特価販売を実施することになりました。

「5割引」でしかも税込みというまたとない機会でもあり、現在既に全号揃うのは300セット前後となってきている状況で、従って今後は品切れの号が発生することが考えられますので、この際会員各位のご所属先やご関係先への架蔵促進にぜひお力添え下さいますよう、お願い致します。

また、途中入会で本誌を揃いでお持ちでない会員の方々も、この機会にお揃え頂きたいと思います。なお、割引販売はセットに限り、分売については割引は行いませんが、今回は分売も税込み3000円で販売致しますので、ご利用下さい。

○品名＝『書学書道史研究』第10号刊行記念・バックナンバー共全10冊揃いセット

○頒価＝15000円（5割引・税込み・送料別660円）

○特売期間＝平成13年6月1日～9月30日

○申込方法＝左記発売元宛に電話、FAX、はがき、メール等でお申し込み下さい。納本先と請求先を明記して下さい。10日前後で、納品書、請求書と振込用の振替用紙を添付してお届けします。折り返し、代金をお支払い下さい。公費の場合は、その旨ご連絡下さい。

◇

【萱原書房】〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町29-35　美術新聞社内
TEL 03-3462-5251
FAX 03-3464-8521
e-mail：kayahara@kayahara.com

『年表』の普及に一層のご協力を

一昨年の発売以来、関係方面に広くご好評を頂いている『日本・中国・朝鮮／書道史年表』ですが、まだ目標部数の55％前後に留まっており、これが国際大会の大幅赤字の原因となって、この処理のために㈱萱原書房に多大な財政負担を背負わせる結果となりました。

ここに改めて、一層の普及促進方、ご協力をお願い致します。

（事務局）

新入会員紹介（平成12・9～13・4）

○野口林造（白汀）S6　大東文化大学教授　芸術

○王海濱（海天・伯洋）S35　筆の里工房国際交流指導員　中国古代書画鑑定、書道史

○谷口邦彦　S35　広島大学附属中・高校教諭　書写・書道教育

○染谷由香理　S33　千葉県立生浜高校教諭

○和田圭壮（勁艸）S38　福岡教育大学専任講師　書写書道教育

○鈴木かおる（麗薫）S39　東京家政学院大学講師

○中一惠（香翔）S19　高野山大学教授　かな

○河合仁　S24　都留文科大学講師　書道史

○當波ゆう子　S46　慶應義塾湘南藤沢中等部高等部講師　書写書道教育、中国書道史

○加藤祐司（東陽）S20　東京学芸大学教授　書道科教育学

○城所正（湖舟）S5　横浜国立大学名誉教授　日本の書

○松本仁志　S39　広島大学助教授　書写書道教育

○池末礼禧　S14　純真女子短期大学助教授　かな書道

○石井健　S45　東京学芸大学助手　日本書道史

○西野義正（象山）S10　佛教大学講師

○湯浅知文　S49　静岡大学院生

○滝口雅弘　S51　静岡大学院生　書写書道教育、書論研究

○古木誠彦　S41　九州女子大学専任講師　漢字学、文字学

○山口恭子　S46　法政大学院生　松花堂昭乗に関する研究

○計良裕佳（袖石）S30　群馬女子短期大学講師　篆刻

○福島輝子　S21　専修大学講師　かな（日本）

○承春先　S31　昭和女子大学講師　日本・中国書道史

○長野秀章（竹軒）S24　東京学芸大学教授　書写書道教育

○角紀子（玉翠）S5　国語国文学、書道（漢字・仮名）

○大根田峯子（照雲）S9

○法水光雄（越仙）S23　福井大学教授

○家入博徳　S50　古筆学

○西原清繁（清繁）S28　埼玉県立浦和商業高校教諭　中国・日本の漢字に関して

○本多和宏　S50　新潟県立新潟北高校講師　篆刻、書道史

○田中之博　S30　MOA美術館学芸部資料課長　書跡

○永由徳夫　S40　駒場東邦中・高校教諭　書論、書道史

○望月一樹　S36　川崎市市民ミュージアム学芸員　日本古代史

○山内常正　S31　静岡大学講師　日本書道史

〈注〉記載内容は、氏名（雅号）生年、現職、専門分野（入会申込書類による）

学会だより（12・10～13・5）

◆会議・会合メモ

12・10・8＝国際大会実行委員会・打ち上げ兼事後処理問題検討会（於日本教育会館）
12・11・18＝選挙管理委員会・第Ⅵ期役員改選選挙開票作業（於本部事務局）
12・12・9＝編集局編集委員会・編集会議（於本部事務局）
12・12・10＝第27回臨時理事会（於日本教育会館）
13・2・3＝常任理事会新年顔合わせ会（於本部事務局）
13・3・3＝編集局編集委員会・編集会議（於本部事務局）
13・4・1＝編集局編集委員会・編集会議（於本部事務局）
13・4・22＝第28回臨時理事会（於一庵アートホール）
13・4・24＝事務局・会報編集委員会（於本部事務局）
13・5・11～13＝編集局学術局合同・新企画担当委員会編集会議合宿（於八ヶ岳萱原山荘）

◆会員動静

○興膳宏理事長＝京都国立博物館館長就任
○森上洋光会員＝四国大学文学部書道文化学科専任講師新任
○古木誠彦会員＝九州女子大学文学部専任講師新任
○横山弘平会員＝13年度日展五科新審査員就任
○角元正燦会員＝13年度日展五科新審査員就任

◆会費納入のお願い

本年度の会費をご納入頂くための振替用紙を同封致しました。会費は、年額六〇〇〇円（院生の方は三〇〇〇円）です。学会はすべて、会員各位の会費で運営されています。ぜひ年度初めの完納をお願い致します。

なお、会費を滞納されている方は、事務局まで文書（FAX可）でご照会下されば、ご納入頂く金額をご連絡します。ただし、事務局手薄のため、電話での照会には応じられません。

また今般、理事会決定により、会費を三年以上滞納の方には、学会誌の送付を保留する措置がとられることになり、合わせて長期滞納の方には、紹介会員・推薦役員と事務局が連携して個別に事情調査等を行うことになりました。ご協力をお願いします。

◆新会員紹介のお願い

学会は名実共に斯学研究の中核機関としての組織確立をめざし、「一〇〇〇人会員」体制の早期実現を悲願としております。ご周囲、ご関係方面に書学・書道史に限らず考古、歴史、文学、言語、美学、哲学、創作に至る幅広い関連諸分野で会員としてふさわしい方がおられましたら、ぜひご紹介下さい。

なお、新会員の入会手続きとしては、役員（理事・監事）推薦と理事会承認を要する規定となっております。ご紹介の際は、いずれかの役員または事務局にまずご相談頂き、特に大会での発表や学会誌への投稿を急いでおられる方の場合は、原則春秋二回開催の理事会のタイミングに合わせて頂けると、スムーズに運ぶことができます。よろしくお願い致します。（事務局）

13年度事業活動計画

4月22日　第28回臨時理事会
5月11～13日　編集局学術局合同委合宿会議
6月1日　会報第1号発行
6月下旬　編集局・編集会議
7月上旬　「会員研究業績一覧」ネット公開
7月下旬　第12回大会運営委員会
8月20日前後　編集局学術局合同委合宿会議
9月末日　学会誌第11号完成
10月上旬　会報第2号発行
11月上旬　新企画「書道史事典」(仮)完成
11月9日　第29回定例理事会
11月10日　第12回大会（於埼玉大学）
12月9日　選挙管理委員会会議
12月15日　第Ⅶ期役員改選選挙告示
12月末日　学会誌第12号原稿投稿申込締切
1月15日　役員改選立候補（推薦含む）締切
2月15日　役員改選選挙投票開始
3月15日　役員改選選挙投票締切
3月16日　役員改選選挙開票
3月31日　第30回臨時理事会・第Ⅶ期役員会発足
3月31日　学会誌第12号投稿原稿受付締切

会報発刊に当たって（編集後記）

◆このような会報を作って、年一回のそれも「格式を重んずる?」学会誌の欠を補おうという案自体は、学会と会員、また会員相互のコミュニケーションをもっと密にする上で有効と、理事会内部ではかなり早くから検討されてきたことだったが、なかなかキッカケがつかめずこれまで実現に至らなかった。それがこの四月の理事会で一気に決定を見、しかも春秋二回、今年度からすぐにということになったのは、会員も五〇〇名を超え、国際大会もみごとにやり遂げて21世紀を迎えた学会の今、ということと無縁ではないだろう。この会報が、学会のさらなる活性化の一助となってくれることを祈りたい。

◆編集については、目下編集局が学会誌の編集業務以外にも、業績調査関係、新企画関係と多忙を極めており、またこの会報発行が事務局提案で決定に至った関係もあって、当面事務局が担当することとなった。このため事務局内に副事務局長の鈴木晴彦理事を中心に高城弘一、柿木原くみの両幹事を加えた編集委員会を設置し、実務に当たってもらった。

◆「会報を作る」という決定事項だけで、あとは全く白紙の状態からここまで僅か一カ月余という突貫工事を余儀なくされ、委員諸氏も苦労したし、執筆願った役員各位や各部局の責任者各位にも十分な時間を用意できず、しかも誌面的な制約から二回も書き直し願った方もおられる。学会のためとはいえ、ご協力に対し深く感謝申し上げたい。（萱原 晋）